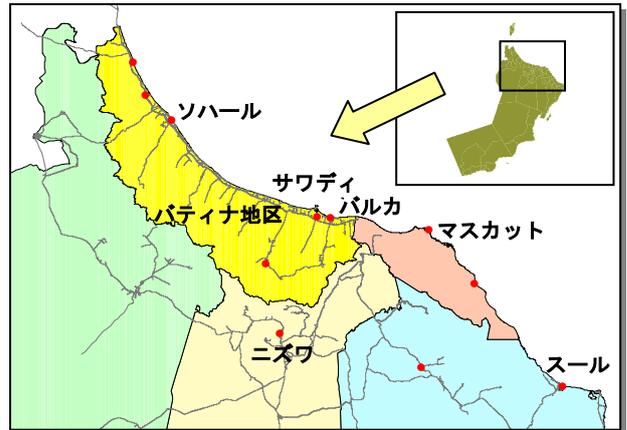


マングローブ生態系に学ぶ

第3回：オマーン国における専門家派遣業務

我が社ではオマーン国における入り江の植生復元のためのマングローブ植林を目的として、2000年4月から個別派遣専門家を地方自治環境水資源省に派遣している。これに先だて、同省ではバティナコースト沿岸のバルカでヒルギダマシの移植を行っているが（1997年）、移植後直ぐに大潮と重なった嵐により活着以前にながされてしまい、結果的には失敗したという経緯がある。一方、国の保全・開発計画でもマングローブに対して、どのような取り組みをするのか、その位置づけはどのようなになっているのか、具体的指針は無かった。そこで、着任当初、主要なマングローブ植生及び入り江の実地踏査を行って現況把握に努め、そこから感じた事をレポートにし、それを基にオマーン側との協議を行った。

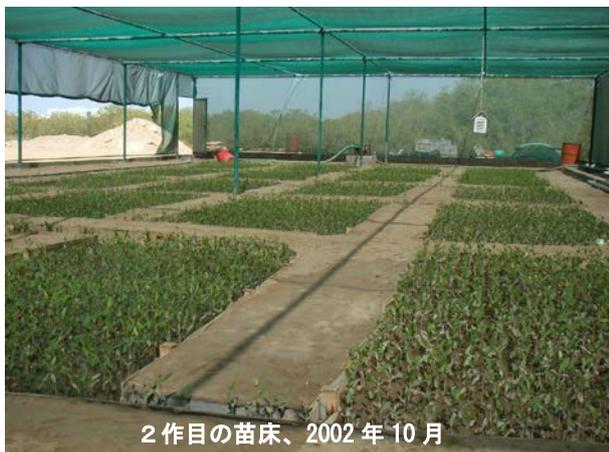


要請されていた、「適切な場所に苗床を建設し、育苗し、適切な場所に移植する」という業務も、可能ならば出来るだけ多くの入り江をヒルギダマシによって緑化したい、というオマーン側の極めて漠然とした意向によるものであることが判った。総論は総論として押さえてあっても、各論となると具体的な提案、方策が一切無い状態であった。そんな中、2000年8月にはポンプ灌漑式苗床を完成させて苗木生産を開始した。

しかし、マングローブには環境にとって正の機能（水棲生物の涵養、生物多様性の保全）のみならず、人の生活にとって負の要素（蚊の発生源、底泥の悪臭等）もあるわけで、所構わず植林・緑化すれば良いという物ではない。なにか基本計画といったものが不可欠であると感じていた。植林するに際し、一番心を砕かねばならない事は、近隣に居住する地域住民の素朴な問いに如何に答えるかということである。何故ここに木を植えるの？植えると何か良い事があるの？このような問いに答えていくことは、とりもなおさず環境教育・啓蒙そのものである。時間も手間もかかるのが教育であることは、日本でもオマーンでも同じである。

そこで、サワディビーチでの最初の植林から、サワディの集落から労働力を調達した。自分たちで植えた木々を自分たちで壊すことは恐らくしないだろう、と期待して。翌年も同じ人達を集めた。最初の年には我々の回答にピンと来なかった人達が、2年目には「この頃木が大きくなってきて、鳥や魚が増えてきたような気がしないでもない」という言葉を口にしたとき、労働力どころかおおざっぱな環境調査員にもなって貰えると確信した。おまけに当初、現地業務費で賄っていた臨時雇用費も、3年目からは環境省が手当するまでになってきている。競争入札で会社に任せるより、地元に出向いて人集めしたほうが経費的にも安くつき、仕事も覚えて貰えることが役所にも判ったからであろう。

これまでに判った事は、地元の間と良い関係を築き、労賃による収入であれ、魚が増えた事であれ、彼等にとって何らかのプラスになることに彼等自身が気付き理解さえすれば、あとは彼等がケアしていく（行政サイドからのケアも不可欠だが）、ということである。このように官民一体となった動きがとれて初めて、持続可能な活動になり得ることがわかってきた。



2 作目の苗床、2002 年 10 月



2 回目の移植、2003 年 2 月、サワディ